

誰もが知りたい
ローザンヌ宣教シリーズ

No. 2

福音と文化
— ウィローバンク・リポート —



*Let
the Earth
hear
His Voice*

Lausanne
Occasional
Papers

No. 2

The Willowbank Report —

Gospel and Culture

Lausanne Committee for World Evangelization

関西ミッション・リサーチ・センター/日本福音同盟

誰れもが知りたい
ローザンヌ宣教シリーズ

No. 2

福音と文化

1983年初版

1987年再版

ローザンヌ宣教シリーズ

「福音と文化」 再版に寄せて

1974年にスイスのローザンヌで開かれた、世界宣教国際会議（ICOWE）は、世界の福音派が結集して、今世紀の中にどのようにして福音を地球上に満たすかを真陰に考え、学び、祈るために召集された、まさにエポックメイキングな会議であった。

あれから、もう10数年の歳月が流れた。その間、世界の各地で、ローザンヌ・ムーブメントの継続的な活動として、各地域や各国、各都市などで、ミニ・コングレスやコンサルテーションが数多く開催されてきて枚挙にいとまがないほどである。その中の一つで、比較的早い時期に開かれたのが、「福音と文化」に関してウィローバンクで行なわれたコンサルテーションであった。

その報告（レポート）がいち早く、ローザンヌ宣教シリーズとして英文で出版され、テーマがテーマだけに、すぐに各国語に翻訳されて、福音派の指導者達の間に手渡されてきたのである。

どちらかと云えば「福音と文化」の問題に対して、従来、福音派は全体的に云えば、実益優先で基本研究を怠ってきたと評されても仕方のない立場をとってきた。しかし、1974年を境として、最早この問題は避けて通ることが出来ないものとして、真正面から取り組まれてきたと云っても過言ではあるまい。

このウィローバンクの会議で紹介された、すぐれた論文は、ストット博士とクート博士の編纂により、1冊の立派な単行本として出版され、（英文の題名は“Down to Earth”）部分的にはあるが邦訳されていると聞いている。関西ミッション・リサーチ・センターはいち早く、このレポートの

方の出版をと願って、中島守教授の手をわずらわして初版の翻訳刊行を実行に移し、好評のうちに大部分を売りつくしたのである。

このたび、日本福音主義神学会が京都で開催する「福音と文化」に関する研究会議の参加者やこれに関心を寄せる多くの教友や信徒の諸兄姉の要望に応えるため、再版に踏み切った次第である。

そもそも「福音と文化」の持つ、様々な課題やそこから派生する問題——例えば、コンテクスチュアリゼーション（仲々適当な訳語が見つからず苦労している）の問題などは、たゞ宣教学者や神学者達が学問的関心の対象として考察するだけでなく、伝道の現場で働く、教職や信徒達にとって、非常に身近な問題であるだけに、こうしたレポートを足がかりにして、わかりやすく、平易な言葉で、そうした問題を掘り下げていってもらいたいものである。

今日、地球上には約50億の人々が生活している。その中、30億以上がノン・クリスチャンである。これが今世紀から21世紀に移行してゆく時代には、総人口62億の中、ノン・クリスチャンは、何と42億にのぼると云われている。

これだけの人々にどうやって到達してゆくのかを考える時、たゞ、数字を見るだけでも大変だと感ぜずにはおられないが、それらの人達が多様な文化的モザイクの中に生活していることを知る時、彼等にどう伝達し、彼等がそれをどう受容するかを考えずして、福音宣教のわざにたずさわっていても、全く意味のないことであることを改めて覚えさせられるわけである。

主イエス・キリストの宣教大命令は、あくまでも、「それゆえ行って、あらゆる国の[・]人々を弟子とせよ」（マタイ28・19）である。あらゆる国人とは、たゞ国家を単位とする人々と云う意味ではなく、人類学者の分析によれば、何と2万4千の部族がいるそうであるが、言語的、文化的に異質な部族や、人々のグループを指して云っているものと受けとれるのである。

そうすると、エルサレムから地の果てまでは、たゞ単に地理的なひろがり

を意味するだけでなく、文化的なへだたりや距離を乗り越えて福音が証しされ、宣べ伝えられてゆかなければならないことを意味しているのである（使徒 1・8）

福音の本質を変えることなしに、一つの特有の文化的状況の中に福音はどう浸透してゆくのであろうか？これが私達の課題である。

同じ、日本という土壌の中でも、十把一からげに日本文化と割り切って考えていけない問題もある。福音を抽象的な真空の状態で語り伝えても、あるいはそれを受容したいと思っけていても、そういう福音はその人の生涯に何ももたらすことは出来ないであることを心に深く銘記しよう。

とまれ、この小冊子が一人でも多くのキリスト者によって読まれ、学ばれ、さらに発展させられてゆくことを祈ってやまない。

1987年 11月

関西ミッション・リサーチ・センター

理事長 古山 洋 右

目 次

序 論	1
1. 文化の聖書の根拠	3
2. 文化の定義	5
3. 聖書の啓示における文化	8
(a) 聖書の靈感の性質	8
(b) 形式と意味	9
(c) 聖書の規範的性質	10
(d) 聖書の文化的制約性	11
(e) 聖霊の継続的働き	12
討議課題	12
4. 神の言を今日的に理解すること	14
(a) 伝統的手法	14
(b) 文化脈的手法	15
(c) 学び続ける共同体	16
(d) 聖書の沈黙	17
討議課題	17
5. 福音の内容とその伝達	18
(a) 聖書と福音	18
(b) 福音の真髄	18
(c) 福音伝達における文化的障害	19
(d) 福音伝達における文化的感受性	21
(e) イスラム世界におけるクリスチャンの証し	22
(f) 結果への期待	23
討議課題	24
6. 求む、謙遜な福音の使者！	25
(a) 宣教者の謙遜についての分析	25

(b) クリスチャンの証しの模範としてのキリストの受肉	28
討議課題	31
7. 改心と文化	32
(a) 改心の徹底的性質	32
(b) イエス・キリストの主権	33
(c) 改心者とその文化	35
(d) 力の対決	36
(e) 個人と集団の改心	37
(f) 改心は瞬間的か除々か	38
討議課題	40
8. 教会と文化	41
(a) 古い伝統的方法	41
(b) 「機能同義」モデル	42
(c) 教会の自由	44
(d) 権力構造と宣教	46
(e) 偏狭主義の危険性	48
(f) 文化に対する教会の影響	50
討議課題	53
9. 文化、キリスト教倫理および生活様式	54
(a) キリスト中心性とキリスト類似性	54
(b) 道徳的標準と文化的習慣	55
(c) 文化変容の過程	57
討議課題	59
結 論	59
補 遺	
研究会議参加者一覧	60
抜萃参考文献	63

序 論

福音伝達の過程は、その伝達方法を生み出し、またその中で福音が宣伝せられる人間の文化と、切り離すことができない。この事実は、1974年7月の、ローザンヌ世界福音化会議における最大の関心事の一つであった。そこで、ローザンヌ継続委員会の神学と教育研究グループは、1978年1月にこの主題のための研究会議を開催した。会議は「福音と文化」について研究するため6大陸より集まった、33人の神学者、人類学者、言語学者、宣教師、牧師たちによって構成された。ローザンヌ継続委員会の伝道戦略研究グループとの共催のこの会議は、以下のような四つの目標を持っていた。

1. 神の啓示と、神の啓示に対する我々の解釈と、神の啓示の我々への伝達、また、それを聞いた者たちの、改心と、教育と、生活様式における応答の仕方、とに特別の焦点をあてつつ、福音と文化との相互関係について我々の理解を発展させること。
2. 越文化（cross - cultural）的に福音を伝達するということの応用の仕方に対して、的確に思考すること。
3. より正確な福音伝達のために必要とされる手段を見出すこと。
4. この研究会議の成果を教会および宗教団体の指導者達と共有すること。

この報告書は、事前に配布された17の論文と、会議中に作られたそれらの論文の要約およびそれらへの意見、また全体討議や分団討議において表明された多くの見解を反映している。

6日間にわたる会議のプログラムはギッシリつまっていて、我々は休むことなく討議を重ねた。結果としては、前提条件や神学と社会科学の手続きについ

て、またそれらをどのように関連づけるか、というような基本的な方法論的課題は十分に展開できなかった。また、討議を進めるにつれて起ってきた多くの問題点は一応横におかれ、また特殊な問題の論議は打ち切らねばならなかった。ゆえに我々は我々の云っていることがある程度暫定的なもので、種々の点において将来の研究の光の下でつきつめられ、深められねばならないものであることを充分承知している。加えて、多くの一般論的言い方に頼っているが、これらの一般論が特殊な状況にどう関わるかを示すためにはもっと多くの事例研究がなされねばならない。

この研究会議の終了前に、我々は報告書をまとめ、また校正するという共同作業に時を費した。この最終文書は報告書であって、声明書や宣言文ではない。それゆえ誰一人署名はしていない。しかし我々は、これをウイローバンクにおいて行なわれたことの要約として世に送ると共に、研究と適切な行動がとられるためにこれを世界中の主にあるクリスチャンたちにゆだねるものである。